

理學博士小倉謙の「羊齒植物の解剖學」

に對する授賞審査要旨

羊齒植物は、地質學上の古生代以來地上に繁茂せる大多數の祖型有管植物を包含し、其の解剖構造の系統的記述は蓋し至難の業に屬す。著者は本著書に於て歐米先進學界の未だ能くせざりし所を遂行し、大に我學者の實力眞價を發揮顯揚せるものと謂ふべし。

本書は、著者が有名なる植物解剖學叢書の監修者故 Lindeau 教授の依頼に中り、其の一卷として執筆し刻苦精勵二年有餘の日子を費して略々成稿を告げ、一九三八年に至り *Anatomie der Vegetationsorgane der Pteridophyten* なる題名の下にベルリンに於て公刊せるものにして、頁數四百七十六、圖版三百八十二に上り、引用文獻一千二百餘篇の内容を著者の卓越なる見解に基きて整理安排し、且つその敘述を一貫するに著者自家の新研究の成果を以てせるの事實は、圖版中の百四十、即ち總數の約五分二が原圖なるを以ても亦これを窺知すべし。

今本著書の内容中注目すべき點を擧ぐれば、第一篇總論（頁數一四七）にて、先づ莖の構造の概念を述べ、更にこれを表皮、皮層、髓、中心柱、花穗、生長點及び分裂組織の各節に分ち詳論し、就中最も重要なる中心柱に就ては、巧に從來の中心柱學說の錯綜せる歴史を解説したる後、中心柱の五主要型及びその三十三分型を

區別し、その相互關係、特に個體發生上の連繫を論じて、著者の創意に係る體系を樹立せり。次にその葉に就て構造の概要、葉柄と中軸、葉片、胞子葉、生長點等の各項を細敘し、特に葉柄及び中軸に於ける維管束の走向式に留意し、又種々の中心柱型の關係に於て、獨自の見解を披瀝せり。終りに根に就ては、構造概論、表皮及び根冠、皮層、中心柱、生長點及び分裂組織の各項に就きて前二章と等しく詳説を試みたり。

第二篇各論(頁數二五二)にては化石及び現生羊齒植物の全般に亙り、Engler, Wettstein, Scott, Jeffrey, Hirmer 等諸家の分類法式を參酌して、先づ *Aphyllata* (無葉類)、*Microphyllata* (小葉類)、*Macrophyllata* (大葉類) の三大別を設け更にこれを綱、目、科に細分し、其の各群に就て莖、葉、根の構造並に個體發生上の特徴を詳叙し、殊に其の系統發生的連關を明らかにすべき見地の把握に努めたり。

之を要するに、著者の本著書は、近代に於ける植物解剖學文獻中の白眉と稱すべく、其の敘述の周到精細にして獨創的見解の豊富なるは、著者の學殖の深きを示すと共に、國際學術界に貢獻せる所頗る大なるものと謂ふべし。